キルケゴールのトレンデレンブルクに対する関係

―ヘーゲル哲学批判の視座から―

平林孝裕

問題設定

キルケゴールは、『哲学的断片への結びとしての非学問的後書』（以下、『後書』と略記）において、ヘーゲル哲学を批判し、ことに論理学的運動の不可能性を主張した。彼は、このような論理学的運動に対して、実存の主体的決断によってのみ可能なパトス的運動としての「飛躍」を定立するに至った。このような彼の飛躍の概念の形成には、『あれかこれか』以来『後書』に至るまで続けられたキルケゴールの哲学研究が役立っている。この中で、特にトレンデレンブルク（一八〇二―七二）の研究が、ヘーゲル批判と飛躍の理論の形成にとって重要であったことは、すでに多くの研究者によって示唆されているが、この影響の問題が正面から論究されたことはなかった。[1] そこで本稿の目的は、「キルケゴールのヘーゲル理解」という包括的研究の一部として、キルケゴールのヘーゲル批判に対するトレンデレンブルクの影響を、飛躍およびこれと関連する運動についての研究を中心に明らかにすることにある。

さて、このような影響関係を論ずる場合は、単にトレンデレンブルクがキルケゴールの思想に影響したか否かだけが問題なのでなく、≪いかなる影響があったのか≫という影響の在り方が解明されなければならない。そこで、この問題の解明は、キルケゴールの思想形成の過程の中で、トレンデレンブルクの研究がいかなる影響を与えたか、思想の上でのいかなる変化を与えたのかをたどることによる。それ故、本研究は、キルケゴールの思想の形成過程を解明する形成論的研究でなければならない。しかし、それは、キルケゴールの思想の発展をトレンデレンブルクの影響に還元するというのではない。むしろ、いかなる点で関連がみられ、またみられないのか彼の思想の展開に即して区別してゆくことによって、他の思想家の影響を原因とする説明からは、理解しえないキルケゴールの思想の独自性の解明を目指すのである。

そこで以下のような仕方で解明を試みたい。トレンデレンブルク研究以前の運動についてのキルケゴールの見解（一）、トレンデレンブルク研究の検討（二）、『後書』以前の著作でのトレンデレンブル

クの影響（三）、『後書』におけるトレンデレンブルクの影響（四）、の順で論じてゆく。

一　トレンデレンブルク研究以前の《運動》についてのキルケゴールの見解

考察にはいる前に、まずキルケゴールが所有したトレンデレンブルクの著作を、『蔵書目録』によって確認しておこう。(2)

① Elementa logices aristoteleae, editio altera recognita et aucta, Berolini. 1842. (Ktl. 844)

② Erläuterungen zu den Elementen der Aristotelischen Logik, Berlin 1842. (Ktl. 845)

③ Platonis de ideis et numeris doctrina ex Aristotele illustrata, Leipsiae 1826. (Ktl. 842)

④ Die Logische Frage in Hegels System, Leipzig 1843. (Ktl. 841)

⑤ Logische Untersuchungen, Berlin 1840. (Ktl. 843)

⑥ Aristotelis de animalibri tris, ed interpretum graec, autoritatem et commetariis illustravit Fr.A.Trendelenburg, Jena 1833. (Ktl. 1079)

⑦ Geschichte der Kategorienlehre, Berlin 1846. (Ktl. 848)

⑧ Niobe, Einige Betrachtungen über das Schöne und Erhabene, vortragen im wissenschaftlihen Vereine zu Berlin ; mit zwei Steinzeichnungen. Berlin 1846. (Ktl. 847)

これらの著作の中で、キルケゴールが実際に著作で言及するのは、⑤のみであり、遺稿で言及するのは、①・②・④・⑤・⑥・⑦である。

次に、トレンデレンブルクとキルケゴールとの直接的交渉の可能性をみておこう。キルケゴールは、レギーネとの婚約破棄の直後、ベルリンに滞在し、ヘーゲルの死後にベルリン大学に招聘されたシェリング、またヘーゲル学派のヴェルダーの講義に出席している。ちょうどこのとき、トレンデレンブルクもベルリン大学で講座を担当しており、その主著である『論理学研究』(⑤)も公刊されていた。しかし、キルケゴールは、のちに、ある悔恨をもって語るように、この講義にほとんど関心を示さなかったのである（Pap.Ⅷ¹ A 18)。それゆえ、キルケゴールは、トレンデレンブルクの思想をまったく彼の著作によって学んだといえる。

キルケゴールが、初めて運動について内容的に言及する著作は、『反復』である。『反復』において彼は、ヘーゲル哲学で「媒介」(Mediation) が、しばしば問題にされたが、それは単なる「饒舌」にすぎず、「媒介」という「近代的な移行に対応するギリシア的な運動の概念の考察のほうが、はるかに注目に値する」(S.V.Ⅲ S.211) と、キリスト教的範疇である「反復」との対比においてギリシア哲学における運動の概念を見直すことを要求している。このギリシア哲学における運動の概念についてキルケゴールが注目したのは、一八四二年から一八四三年にかけての哲学史の研究からである。彼は、『反復』において運動についてこれ以上の規定をしないので、この哲学史研究を検討することによって、この時期にキルケゴール

が、運動の問題をどのように考えていたかをみておきたい。

キルケゴールは、『あれかこれか』を書き上げると、W・G・テンネマンの『哲学史』を主たる手引きとして古代から近代にいたる哲学史について、彼の生涯で最も包括的な研究をしている。

キルケゴールは、この哲学史研究においてテンネマンによるアリストテレスの記述、特に『自然学』に関する記述に注目する。[3] この記述の中で、「可能性から現実性への移行」は、「変化」であり、「テンネマンはキネーシス（κινησις）を変化という語に翻訳した」ことが、彼の関心をひきつけた。この規定を変化の根本的規定として『哲学的断片』、『後書』において彼は使用している。このアリストテレスの運動の規定に注目したのは、彼が「これら全部が論理学における様々の運動に関して注意するのに役立つ」と考えたからである。（Pap. IV C 47, 48）。

キルケゴールが論理学的運動を問題にする際に考えているのは、近代哲学、とくにヘーゲルの哲学において、主張された「移行」、「媒介」という問題である。周知のように、ヘーゲルは『エンチュクロペディー』の『論理学』において、有から無への移行としての生成を論じ、生成において現存在が定立されると述べている。しかし、キルケゴールによれば、現存在は「規定的存在」と言われても、「強調点は、規定的に置かれており、存在にあるのでない」から、論理学の中では、本当の存在は取扱われていないのである。つまり、論理学の中での存在は、単なるカテゴリーとして使用されているのであって、存在そのものは論理学の中で扱われない以上、その中で有から無へ移行したり、現存在が生成することもあり得ない。それゆえ「存在論の中には、移行しないものばかりがある」と、キルケゴールは批判するのである。（Pap. IV C 79）。近世哲学が、存在の生成を論じ得ないのに対して、古代哲学が取り扱った運動は、「世界がそれによって生成し、もろもろの元素が相関を構成する」運動であり、存在そのものに関する運動であるとキルケゴールは考えた（Pap. IV A 54）。それゆえ、『反復』で「近代的な移行の範疇に相応するギリシア的な運動の考察の方が、はるかに注目に値する」と述べたのである。

この運動に関する集中的な研究において、キルケゴールは「パスト的移行」と「弁証法的移行」の対立を見出す（Pap. IV C12, C 13, C 94, C 105）。この対立における弁証法的移行は、近代哲学が問題にした論理学的運動を意味する。これに対してパトス的移行は、個人の生における飛躍を含んだ運動である。すでに検討した哲学研究においてキルケゴールは、近代哲学が「移行」、「媒介」といった運動を明らかにしていないと批判していたが、この運動の問題を彼は、パトス的移行として検討することを構想する。その解決の重要な手がかりとしてアリストテレスの運動の研究にキルケゴールは、注目したのである。

この研究に関連して、キルケゴールはまず、アリストテレスに関するトレンデレンブルクの研究（①、②、③）を購入し、続いてトレンデレンブルクの論理学に関する著作（④、⑤）を手に入れるようになったと考えられる。[4] しかし、この研究と同時期の遺稿には、「トレンデレンブルクは、私を満足させる」という感想を記すが（Pap. IV A 40）、内容についての検討は行っていない。トレンデレ

ンブルクについてのキルケゴールの具体的研究は、一八四四年の飛躍に関する研究に至るまでなされなかったのである。

二　キルケゴールにおける《飛躍》の概念の研究

キルケゴールは、一八四四年になると自己自身のパトス的移行の理論、つまり、生における「飛躍の理論」を構想する(Pap. V C1-13)。彼にとって飛躍の問題を解明することは、「新しい質が連続した量的規定作用からいかに生起するか」という問いに答えることである。つまり、飛躍の理論は、論理学的運動によっては説明しえない量的なものから質的なものへの移行をパトス的移行として解明しようとする試みなのである。この遺稿の中で、キルケゴールが数え上げる飛躍は、例えば、「善から悪への移行という飛躍」、「世界へのキリスト教の進入」という飛躍、「罪の意識」のあらわれが飛躍であるとされるように、特に倫理的、宗教的な領域における飛躍が関心の中心となっている。

しかし、これらの倫理的・宗教的飛躍に対して、ヘーゲル的な論理学的移行をキルケゴールは一貫して拒否している。つまり、ヘーゲル的移行は、その「背進的な思考」によってキリスト教が超克されたかのような誤解を与える危険なものだと考えている(Pap. V C1)。むしろ、論理学的思考は、隠された仕方で飛躍を使用しているのだと、キルケゴールは考えている。例えば、ヘーゲルやヘーゲル主義が「悪無限」を乗り越えたという偉大な功績を主張するが、ヘーゲルが「悪無限を断ち切った」方法こそが飛躍であり(Pap. V C 7)、彼の思弁的方法も飛躍を使用していると、キルケゴールは指摘している。ここで問題であるのは、飛躍を論理学が用いていることではない。むしろ、論理学の中においては飛躍などないかのようにヘーゲル及びヘーゲル主義者が振舞い、飛躍の問題から逃げ出していることが批判されるべきなのである(Pap. V C 8)。

これらの飛躍に関する遺稿の中で、キルケゴールは、アリストテレスの運動についての見解に再び言及し(Pap. V C 6)、また「弁証法的飛躍とパトス的飛躍」の対立を呈示している(Pap. V C 7)。このことは、この飛躍の研究が、一八四二年から一八四三年に至る哲学史研究でキルケゴールが検討した運動の問題を、飛躍の概念を手懸りにして明らかにしようとした試みであることを示している。

キルケゴールは、この飛躍に関する遺稿の中でトレンデレンブルクに初めて内容的に言及し、『アリストテレス論理学初歩解明』(②)を参照している(Pap. V C 10)。指示された箇所においてトレンデレンブルクは、「個別的なものから普遍的なものを構成ないし推論するために、帰納は本質的に完全でないので、飛躍が必要である」と述べている。[5] 帰納における飛躍は、同時期の遺稿で詳細に論じられ、ここでも『論理学研究』(⑤)、『アリストテレス論理学初歩』(①)、『アリストテレス論理学初歩解明』が参照されている。

「最高の原理は、間接的（否定的）にのみ証明することができる。この思想は、トレンデレンブルクの『論理学研究』にしばしばみられる。これは私の飛躍〔の研究〕にとって重要であり、そして最高のものは、ただ限界のように達しうることの証明のために重要である。……

推論の諸形式において否定的に推論する可能性は肯定に対して

優越がある。『アリストテレス論理学初歩解明』五八頁参照。

類比と帰納においては、飛躍でのみ推論が可能である。……」(Pap. V A74)。さらに、この遺稿の欄外には、『アリストテレス論理学初歩』の一五節注、一六節以下が参照されている。

この遺稿からわかることは、否定的な推論がある利点をもつというトレンデレンブルクの見解にキルケゴールが関心を持ち、それが飛躍の理論に役立つと考えたことである。では、この否定的推論がどのような利点を持っているかを、キルケゴールの引用箇所から検討しよう。『アリストテレス論理学初歩解明』の五八頁で、トレンデレンブルクは、論理的推論の格について論じて、第一格の二つの形式と第二格のすべての形式が否定的結論であるから、肯定的推論よりも否定的推論のほうが容易であると主張する。[6] さらに、この否定的推論は、単に消極的なのではなく、肯定を間接的に示唆するという点で役立つものだと論じている。否定が肯定を示唆するという利点は、特に間接証明において有効であると、トレンデレンブルクは考える。[7] この間接証明については『論理学研究』の中で一章をさいて論じられる。「間接証明」の章で、アリストテレスからヘーゲルに至るまで根本原理（Principien）は、間接的に証明されたと、トレンデレンブルクは述べる。[8] 根本原理の間接的な証明においては、その対立するものが不可能であることが明らかにされることによって、根本原理の必然性が否定的（間接的）に証明される。一方、このような原理を肯定的に証明しようとすれば、無限の過程が必要となり、結局、証明たりえないのである。[9]

キルケゴールは、先の飛躍に関する遺稿の中で「神の存在を証明するものたちにとって結論することは飛躍である」と述べている(Pap. V C7)。トレンデレンブルクが述べた根本原理の間接的証明によっても、原理は直接に示されるわけではないから、ここにも飛躍が必要だとキルケゴールは考えたと思われる。トレンデレンブルクの否定的推論に関する主張の中に、彼は自分の飛躍の理論と共通なものを発見したのである。しかし、トレンデレンブルクの見解は、キルケゴールを十分に満足させるものではなかった。彼がトレンデレンブルク研究を始めるに当ってのきっかけとなった関心は、飛躍の問題であったにもかかわらず、「トレンデレンブルクは飛躍にまったく注目していない」ことに気づいたのである(Pap. V A74)。さらに、キルケゴールはトレンデレンブルクが数学や自然科学の例ばかりを問題にして、倫理的なものの例に言及していない点で不満をもらし、自分との関心のずれを指摘している（Pap. V C12)。

しかし、トレンデレンブルクによるアリストテレスの論理学の研究は、キルケゴールを満足させなかったにせよ、十分に注目に値するものであった。このことは、彼が『アリストテレス論理学初歩』についてノートを作成し（Pap. V C11)、トレンデレンブルクの校訂によるアリストテレスの『霊魂論』(⑥)を読むようになったことにあらわれる。そしてキルケゴールは、「トレンデレンブルクを賞賛せよ、私の知る限りで最も冷静に思考する文献学者の一人である」と評価するのである（Pap. V A98)。

一方で、キルケゴールは、『論理学研究』を読んでいるにもかかわらず、この著作に含まれているヘーゲルの弁証法に対するトレンデレンブルクの批判に立ち入った研究をしていない。ただヘーゲル

弁証法の始源に対するトレンデレンブルクの見解は知っていた。ヘーゲルは、『エンチュクロペディー』において、思惟は自分自身の力によってのみ始め、「純粋存在」がその始源をなすと述べる。「純粋存在」は、「純粋抽象」であるから「無」であり、純粋存在＝純粋抽象であることによって有が無に、無が有に移行することは「生成」であるとされる。このようにして弁証法は運動を始めるのであるが、ここでいわれる純粋抽象が可能であるためには、「抽象される何ものかが前提されていなければならない」。それゆえ、ヘーゲルが主張する無前提的な始源は、前提なしには不可能であると、トレンデレンブルクは『論理学研究』において批判している。[10] キルケゴールは、飛躍に関して述べた遺稿（Pap. V A 74）に先行する日誌の中で「始源の弁証法」について論じている。

「始源の弁証法は、十分に陳腐である。しかし始源は中断であり、つまりそれによって始めることのできる一連の考えを前提していることを忘れている。無前提な始源などは存在しない。というのも何も他のものを前提しないならば、それによって私がすべてを捨象する行為が前提されないからである。」(Pap. V A 70.vgl. A 72)

キルケゴールは、トレンデレンブルクのヘーゲル弁証法の始源に対する批判をほぼそのまま受け入れている。しかし、キルケゴールは、これらの遺稿での弁証法批判において、『不安の概念』、『後書』で主に問題とされる「運動」について全く言及していない。それゆえ、この時点でキルケゴールは、トレンデレンブルクのヘーゲル批判について十分な研究をしていなかったと考えられる。

一八四四年の飛躍の研究において、主としてキルケゴールが関心を持って研究したトレンデレンブルクの著作は、アリストテレスに関する著作である。すでに彼は『論理学研究』、『ヘーゲルの体系における論理学的問い』(④) をすでに講入していたが、十分な研究は、まだ行われていないのである。

三　『後書』以前の著作におけるトレンデレンブルクの影響

これまでの考察で遺稿でのキルケゴールのトレンデレンブルク研究の状況が明らかになった。そこで著作におけるトレンデレンブルクの影響を解明せねばならない。

一八四三年に、キルケゴールは、『おそれとおののき』と『反復』を同時に刊行する。しかし、これらの著作との関係は、「私が『反復』を書いたときに、トレンデレンブルクのものは何も読んでいなかった」と述懐するように、キルケゴール自身がトレンデレンブルクの影響を否定している（Pap. VI¹ A 18）。それゆえ、まず問題となるのは、『哲学的断片』と『不安の概念』におけるトレンデンブルクの影響である。『哲学的断片』と『不安の概念』を執筆する時点で、キルケゴールはトレンデレンブルクの著作の中で、①、②、③、④、⑤をすでに所蔵している。

『哲学的断片』で、トレンデレンブルクは言及されることがない。ただ神の存在証明が飛躍となると述べる箇所は、一八四四年の飛躍の研究との関連から注意しなければならない。(S.V. VI S.43)。しかし、神の存在証明が飛躍であるとの見解は、遺稿にトレンデレン

ブルクの研究以前に記され（Pap. V C 7）、これは、必ずしもトレンデレンブルクの示唆であるとはいえない。

『不安の概念』については、E・ヒルシュが指摘するように、『ヘーゲルの体系における論理学的問い』（以下、『論理学的問い』と略記）が草稿において参照される（Pap. V B 49, 6）。この草稿に対応する『不安の概念』の緒論は、論理学における運動および運動の動力としての否定の問題を論ずる（S.V. IV S. 111-112）。キルケゴールによれば、論理学の中には、運動は本来含まれていないにもかかわらず、ヘーゲルによって論理学の中に運動が導入された。この論理学の中での運動を可能にするために、ヘーゲルが使用した動力が、「否定的なもの」である。否定的なものは、対立を引き起こすことによって弁証法的運動を可能にする。しかし、この否定的なものは論理学的運動の中で「反対定立」(Contra-Position) ないし「必然的な他者」に摩り変っており、否定的なものではなくなっていると、キルケゴールは指摘し、ヘーゲルが論理学の中へ運動を持ち込んだことで生じた混乱を非難している。

キルケゴールが参照した『論理学的問い』においてトレンデレンブルクは、ヘーゲルの弁証法的方法の問題点を考察している。この著作は、『論理学研究』で論じられた弁証法に対する批判を要約し、ヘーゲル主義に属する論理学者に対する批判を併せて述べたものである。ヘーゲルの弁証法は、純粋思惟として何ものも前提していないと主張されている。[11] これに対して、無前提な純粋思惟は、運動せずに静止しているしかないのであって、論理学が弁証法的運動をするためには、「空間的運動」が必要であるとトレンデレンブルクは主張する。[12]「この空間的運動は、無前提な論理学の前提であるように思われる」[13]というトレンデレンブルクの見解は、『不安の概念』における、ヘーゲルが論理学の中に運動を持ち込んだというキルケゴールの主張に一致している。

さらに、否定についてもトレンデレンブルクは、『論理学的問い』の中で論じている。まず、否定とは弁証法の中で純粋思惟を前進させる動力とされる。しかし、トレンデレンブルクによれば、「〔弁証法に〕適用された否定は、Aと非Aのような関係における純粋な論理学的否定ではなく、反対（Contrarium）ないし対当（Gegensatz）を産み出すための実在の反対（die reale Opposition）である」。しかし、論理学的方法は、このような実在的反対物を産み出しえないことは明らかであるから、ヘーゲルの弁証法は、この否定の扱いにおいても難点をもっていると、トレンデレンブルクは論じている。[14] この否定が、弁証法においては実在の反対物であるとの見解もまた、キルケゴールの主張と一致をしている。しかし、この実在の反対物を表すのに、キルケゴールは「反対＝定立」(Contra-Position) という「反対」(Contratium) と「反対」(Opposition) を混合した表現を使っている。このことは、キルケゴールの『論理学的問い』に関する研究が、十分でなかったことを示している。それゆえキルケゴールは、『不安の概念』の本文においてトレンデレンブルクを引証しなかったと考えられる。

『不安の概念』については、さらに飛躍について述べておく必要があろう。『不安の概念』は、キルケゴールの著作の中で最も高い頻度で、飛躍という言葉が使用される。[15] しかし、その用法は、「質的

飛躍」とキルケゴールが規定する人類における罪の出現に、ほぼ限定されて用いられており、トレンデレンブルクの著作にキルケゴールが発見した論理学に関する飛躍を論じている例は見られない。

これまでの考察で明らかなように、『後書』以前の著作では、トレンデレンブルクは必ずしも重要なものとして取扱われていないということができる。しかし、注意されねばならないのは、『不安の概念』にみられるように、トレンデレンブルクが興味深いヘーゲル批判を行っていることをキルケゴールが気付いている点である。それは『論理学的問い』からまず知られたが、『不安の概念』においては、十分に論じられなかった。このトレンデレンブルクをヘーゲル批判として検討するという課題は、『後書』へ残されたのである。そこで『後書』におけるトレンデレンブルクの影響を考察の対象としなければならない。

四　『後書』におけるトレンデレンブルクの影響

キルケゴールは、『後書』の中で三度、トレンデレンブルクに言及する。それは、彼がトレンデレンブルクの名に言及する全てである。そこでこの箇所を引用しておこう。

「ヘーゲルのあの比類なき発見であり、比類なき驚嘆された発見である運動を論理学の中へ持ち込むことは（……）、まさに論理学を混乱させる。運動を考え得ない領域で運動を基礎に置くこと、論理が運動を説明できないのに、運動に論理を説明させることは全く奇妙である。この点に関して健全に思考し、ギリシア人によって幸運にも教育された人物を指し示すことができることは、非常に幸福である。――私が考えているのは、トレンデレンブルク（『論理学研究』）である」（S. V. IX S. 93）

「ヘーゲル哲学がトレンデレンブルクに有用な影響を与えなかったというのが私の意見ではない。しかし幸運なことに、ヘーゲルの建物を修繕したり、先へ進むことなど（……）が許せないことであると、彼は洞察したのである」（S.V. IX S.94）。

さらに、この二つと同様の記述が「現実的主体性、倫理的主体性。主体的思想家」の章の注において繰り返される（S.V. X S.9）。

これらの記述からわかることは、キルケゴールが『不安の概念』と同様に、トレンデレンブルクの運動に関する見解を重要なヘーゲル哲学批判であると理解していることである。しかし、ここでキルケゴールが参照するトレンデレンブルクの著作は、『不安の概念』の草稿で言及した『論理学的問い』ではなくて、『論理学研究』である。『不安の概念』を書き上げたキルケゴールは、トレンデレンブルクの主著である『論理学研究』のヘーゲル批判を研究したと考えられる。

そこで『論理学研究』におけるトレンデレンブルクの「運動」に関する見解をまとめておこう。トレンデレンブルクによれば、ヘーゲル弁証法の根本思想とは、「純粋思惟が、固有の必然性から無前提的に存在のモメントを産出し、認識する」ということである。[16] このような弁証法は、ヘーゲルが『エンチュクロペディー』の『論理学』において展開する「生成」の弁証法に最も典型的にみられる。しかし、ヘーゲルも述べている純粋存在が自己同一的であり、無もまた自己同一的であるとすれば、この両者は共に静止に他ならない

のであるから、「二つの静止する表象の統一からどうしたら運動した生成が生ずるのか」と、トレンデレンブルクは批判する。[17] 実は、この何も前提しようとしない弁証法は、静止せる表象を動かすために、論究することなく「運動」を前提してしまっており、生成における存在から非存在への移行があるとすれば、必ずそこには「空間的運動」の図式が伴われているのである。確かにヘーゲルも『自然哲学』の中で、運動について考察している。しかし、「空間的運動」は、外界における運動のみならず、内的な思考においても前提されており、運動はヘーゲル論理学の中に一貫して存在するのだと、トレンデレンブルクは主張している。[18] このように弁証法的方法において空間的運動が前提されているのであれば、加えて、この運動の場としての空間・時間の表象がまた暗黙の中に論理学の中へ持ち込まれていることになる。[19] すなわち、空間・時間の表象の中で論理学的前進のために働く「この空間的運動こそが、まず無前提な論理学の前提なのである」。[20]

ここでトレンデレンブルクが展開した見解は、『論理学的問い』においてキルケゴールが発見したヘーゲル哲学の批判とほぼ共通しているが、一層根本的である。ヘーゲル批判を見る限り、トレンデレンブルクは、運動を拒否しているようであるが、むしろトレンデレンブルクは、運動を存在という外的世界と思惟という内的世界に共通する原理として考えている。[21] ヘーゲル弁証法が批判される理由は、思惟の前提としての運動を何の説明もなく論理学の中へ持ち込んでいるからなのである。

ヘーゲルの弁証法が、運動を前提しているという点で克服し難い問題を含んでいるとするトレンデレブンルクの見解をキルケゴールが『後書』において全面的に受け入れていることは、先に引用した箇所から全く明らかである。また、ヘーゲルが論理学の中に運動と共に、運動の場である空間・時間も論理学の中へ持ち込んでいるとトレンデレンブルクは批判していた。キルケゴールも全く同様に、論理学のような抽象の立場は、運動を理解しておらず、「運動を前提するところの、あるいは運動が前提するところの時間と空間を抽象の言葉は運動に与えることはできない」と、論理学に導入された時間と空間の問題を指摘する（S.V. X S. 54）。この箇所の『後書』の草稿を検討すれば、トレンデレンブルクの『論理学研究』が参照されており、この見解もトレンデレンブルクの示唆によっているのである（Pap. VI B 54, 21）。

またキルケゴールは、ヘーゲルの『精神現象学』について、この著作がヘーゲルの体系といかなる関係にあるのかという問題を指摘している（S.V. IX S. 100）。このようなヘーゲルの体系構成の問題についてキルケゴールは、『後書』以前の著作、遺稿で言及したことはなかった。トレンデンブルクは、『論理学的問い』において『精神現象学』が体系の序論であるか、一部にすぎないのかという体系構成の問題を論じている。[22] キルケゴールは、『後書』のために行ったトレンデレンブルクのヘーゲル批判の研究においてこの問題を知ったことが推定される。

以上のように、キルケゴールにとってトレンデレンブルクの研究は、ヘーゲルの論理学の問題点を全く明確にするものであった。それは、まず『不安の概念』に使用された『論理学的問い』によって

触発され、『論理学研究』を更に読むことによって一層深められたのである。

さらに、『後書』とトレンデレンブルクの影響関係を論ずる上で、看過されてはならないのは、『後書』の中心問題である飛躍との関係である。飛躍の問題は、その構想の時点から『後書』の本質的問題である。キルケゴールが飛躍を重要視するのは、パトス的移行としての飛躍を明らかにすることによって「弁証法的移行とパトス的移行の差異」を明確にしようとしたからである（Pap. VI B 13）。この試みは、信仰が歴史的なものに永遠の真理を基礎づける飛躍であると規定され（S.V. IX S. 89, vgl. S. 80）、この飛躍は論理的証明のような「近似的移行」によっては不可能であると、キルケゴールが主張する点にみられる（S.V. IX S. 88）。「飛躍こそが、方法の背進に対する最も決定的な抗議なのである」（S.V. IX S. 90）。

すでに検討したように、このようなパトス的移行と弁証法的移行の対立を、一八四二年から一八四三年の哲学史研究でキルケゴールは、言及している。この対立の理解は、一八四四年の飛躍の研究において更に深められ、この飛躍の研究と関連してトレンデレンブルクの著作は読み始められた。しかし、先述のようにトレンデレンブルクが飛躍に注目していなかったことは、大いにキルケゴールを失望させたのである（Pap. V A 74）。では、飛躍に関してキルケゴールは、トレンデレンブルクをもはや顧ることはないのであろうか。

『後書』の本文で、トレンデレンブルクに関する箇所は、ヘーゲル批判についての記述が全てであり、飛躍に直接に関連する記述はない。しかし、「可能性から現実性への移行はアリストテレスが正しく教えるように、キネーシス（κινησις）、運動である」という記述（S.V. X S. 54）の草稿で、「可能性、現実性、必然性という概念の研究は、論理学的なものと存在論的なものとの関係を明らかにするために現代が最も必要とするものである」とキルケゴールは記し、この点に関して『論理学研究』に有用な示唆があるという（Pap. VI B 54, 21）。この記述は『哲学的断片』、「間奏曲」と関連する。「間奏曲」では、実存の規定としての生成を明らかにするために、存在の規定たる可能性・現実性と本質の規定たる必然性を区別する（S.V. VI S. 69 f.）。『後書』の草稿において述べられた「存在論的なもの」と「論理的なもの」との関係の研究もこの区別に関係する。これらの区別は、まさにパトス的移行と弁証法的移行の対立に結びついており、『後書』においてもキルケゴールはトレンデレンブルクを飛躍の研究に関連づけていたと考えられる。このことは、『後書』以降の一八四七年に至っての『範疇論史』（⑦）を読んだ際に、「私の論理学的命題の中にみられる、弁証法的移行とパスト的移行との関係の区別という私の命題に関わっている」（Pap. VIII² C 1）という感想を記していることからも証拠づけられる。

実存の規定としての飛躍の解明は、キルケゴールが一八四二年からの哲学史研究、一八四四年の飛躍の研究を継続しておこなう中で、キルケゴールがまず独力で構想し始めた。その際にトレンデレンブルクの著作は、彼にとって直接的に役立つものではなかった。それは『後書』の本文でトレンデレンブルクが飛躍に関連して言及されないことにもみられる。しかし、先の考察で明らかなように、

『後書』以降もトレンデレンブルクは、飛躍の研究のために重要な示唆をキルケゴールに与え続けていたのである。

結論的にいえば、キルケゴールに対するトレンデレンブルクの影響は、飛躍の解明とヘーゲル批判の明確化という二つの点にみられる。[23] キルケゴールは、飛躍の研究へと発展する運動・移行の研究からアリストテレスに注目するようになり、その中でトレンデレンブルクの著作を読むに至った。この飛躍の概念は、すでにみたようにキルケゴールがまず独自に発見した概念であり、彼の著作からこの着想を得たということはできない。しかし、トレンデレンブルクの著作が弁証法的移行とパトス的移行との区別のために重要な示唆を与えたように、飛躍の概念の形成に彼は間接的な影響を与えている。一方、ヘーゲル批判についてキルケゴールは、まず『論理学的問い』を通じてこれを見出し、『論理学研究』を読むことによってその理解を深めている。その成果は、『後書』の叙述に全くそのまま利用されるのである。ヘーゲル批判の道具立てとして運動の問題がトレンデレンブルクによって定式化されていた点はキルケゴールに決定的影響を与えているといわねばならない。

このようなキルケゴールに対するトレンデレンブルクの影響は、彼の思想の中心的問題である運動の理解――運動の理解はまたヘーゲル哲学をキルケゴールがいかに理解したかを解明するうえでの中心的課題でもある――に、密接に結びついている。[24] それゆえトレンデレンブルクの影響の解明は、キルケゴールの運動理解そしてヘーゲル理解の包括的研究の中に位置づけて検討されねばならない。この問題の全体的解明は、筆者の今後の課題にしたい。

注

本稿では、キルケゴールからの引用はすべて割注によって引用箇所を示した。その際、著作は、Søren Kierkegaard Samlede Værker, 3. Udgave, 20 Bd., København 1982.° から引用し、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表す。遺稿は Søren Kierkegaards Papier, I-XIII, København 1968-78. から引用し、巻数をローマ数字で、分類をアルファベットで、整理番号をアラビア数字で表す。

(1) この点に関しては、E. Geismar: Søren Kierkegaard――seine Leben und seine Wirksamkeit als Schriftsteller, Göttingen 1929, S. 267, S. 271. D. Ritschl: 『Kierkgaards Kritik an Hegels Logik (1955), in: Sören Kierkegaard, hg. von H.-H. Schrey, S. 251. なども参照。これらの研究ではトレンデレンブルクの影響は簡単に触れられるにすぎない。唯一の例外が、大谷長『キェルケゴールにおける真理と現実性』(創文社、一九六三年、五七―七六頁)、である。本書で大谷は『論理学研究』を中心にキルケゴールとの影響を論じている。しかし、大谷もトレンデレンブルクとの影響関係の全体的解明は、別の考察が必要であると述べている(大谷 前掲書、六〇頁)。

(2) Katalog over Søren Kierkegaard Bibliothek, ed. by N. Thulstrup, Copenhagen 1957. カッコの中の番号は、その整理番号である。

(3) W.G. Tennemann: Geschichte der Philosophie, Bd. 3, ([1]1801), in: Aetas Kantiana, 272-3, Bruxelles 1969, S. 125-127.

(4) 大谷　前掲書、五八—五九頁。

(5) A. Trendelenburg: Erläuterungen zu den aristotelischen Logik, Berlin 1842, S. 72.

(6) Ibid., S. 58

(7) Ibid., S. 87.

(8) A. Trendelenburg: Logische Untersuchungen Bd. I Berlin 1840, S. 330.

(9) Ibid., S. 327.

(10) A. Trendelenburg: Logische Untersuhungen, Bd. II, S. 24.

(11) このくーゲル弁証法の始源の問題は、一八四五年に書かれた「始源の弁証法」と題されるソクラテスとくーゲルの仮空の対話において再び扱われる (Pap. VI A 145)。この遺稿で「くーゲル」は、「私は無から出発し」、全く何も前提しないのだと主張している。この対話で「くーゲル」は『論理学研究』を読んでいる。『論理学研究』の指示された箇所では、くーゲルの判断についての見解が批判されている。vgl. Ibid., S. 196.

(12) A. Trendelenburg: Die Logische Frage in Hegels System, Leipzig 1842, S. 12ff.

(13) Ibid., S. 14.

(14) Ibid., S. 14 f.

(15) A. Mckinnon: Konkordans til Kierkegaards Samlede Værker, vol. 3., Leiden 1971, pp. 921-922.

(16) A. Trendelenburg: Logische Untersuchungen, Bd. I, S. 23.

(17) Ibid., S. 25.

(18) Ibid., S. 25f.

(19) Ibid., S. 27.

(20) Ibid., S. 29.

(21) Ibid., S. 112f.

(22) A. Trendelenburg: Die Logische Frage in Hegels System, S.23.

(23) 『後書』については、トレンデレンブルクの二つ主要な影響に加えて、個別的な論点での関係を一例だけ挙げておかねばならない。キルケゴールは『後書』でグルントヴィの「比類なき発見」の批判を行うが (S.V. S. 35f, S. 38f)、その草稿でトレンデレンブルクの『アリストテレス論理学初歩解明』に言及する (Pap. B 29, S. 110f)。そこで「神は言葉 (das Wort) であり、範疇もまた言葉 (ein Wort) であるから、範疇は神である」という記述を近代哲学の著作にみられる謬推理の例としてトレンデレンブルクの原文のままキルケゴールは引用している (Erläuterungen zu den aristotelischen Logik, S. 69)。しかし、この草稿は『後書』の本文に結局採用されなかった。

(24) くーゲルとキルケゴールの関係に関する今日まで最も包括的研究をしたN・トゥルストルプは、「トレンデレンブルクは

肯定的にも――アリストテレス論理学の叙述によって――、否定的にも――ヘーゲル論理学論理学の根本的・鋭角的な批判によって――、キルケゴールにとって大いに有意義であった」ことを認めているが、結局、トゥルストルプは、この問題にこれ以上立ち入った研究をしてはいない。N. Thulstrap: Kierkegaards Forholdtil Hegel, Gyldendal 1967. S. 269f を参照。ヘーゲルとキルケゴールの関係の中でトレンデレンブルクの影響を検討するという課題は現在も全く残されたままなのである。

（ひらばやし・たかひろ　筑波大学大学院哲学・思想研究科）